

10. 中宮の過疎化と住民の選択(中宮)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4855

10. 中宮の過疎化と住民の選択

西川 麦子

- I はじめに
- II 中宮小学校卒業者の居住地分布
- III 中宮区民と世帯
- IV 世帯の居住形態と世帯員構成
- V 過疎化と住民の選択
- VI おわりに

I は じ め に

本稿では、1960年代以降の経済、社会状況の変化にたいして、中宮住民がどのような選択を行ってきたのかを、世帯の居住形態や世帯員の構成、中宮住民と他地域転出者との関係に着目し、世帯・個人レベルからとらえてゆく。

今世紀の中宮の人口動態、生業形態の変化については、1章で述べられたとおりである。これを要約すると、1960年代以前、1960年代～70年代、1980年代以降から今日に至るまでと大きく3つの時期に分けることができる。1960年代以前の中宮は、電源開発事業にともなう雇用や関連産業への就業、京都を中心とした関西への冬期、通年の出稼ぎによって、在来の農業、林業が受容できる以上の人口を擁していた。1960年代から1970年代にかけては、第1次産業が衰退、治山、治水工事も一段落し、さらに北陸電力の省力化にともない新規雇用が減少する。生業形態の変化、1963年の三八豪雪、他地域の高校への進学率の高まり、高度経済成長、などの要素が加わり、多数の世帯、人口が流出する。この間、道路や除雪態勢が整備され、日常生活において中宮と他地域と往来しやすくなってゆく。1980年代には他地域への通勤、通学がより容易となり、観光開発によって就業機会も増加する。国勢調査による世帯数、人口統計のうえでは、世帯数は維持されているが、人口は緩やかに減少している。

1994年現在の中宮は、1980年代以降の世帯数、人口動態の流れの延長線上にあり、挙家離村というかたちでの人口流出には歯止めがかかったが世帯規模は縮小している。しかし、実際の中宮世帯の居住形態、世帯構成は、統計が示す以上に複雑な状況を呈している。

IIでは、中宮小学校の卒業生名簿をもとに、1935年から1956年生まれの中宮出身者の現在の居住地分布を示す。中宮住民と他地域に居住する中宮出身者との関係を知る手がかりとなる。IIIでは、本稿で扱う「中宮世帯」について説明する。IVでは、中宮世帯の居住形態を大きく3つの類型に分け、それぞれの居住形態の特徴、世帯構成、転出者との関係などについて述べている。Vでは、過疎化にたいする中宮世帯・個人レベルの対応と中宮地区の現状と今後について考察する。

II 中宮小学校卒業者の居住地分布

中宮小学校は、学制改革により吉野谷村立市原国民学校中宮分教場に代わって1947年に創立され、吉野谷小中学校の発足にともない1968年に廃校した。中宮小学校卒業生名簿には、1947年度第1回の卒業生から1967年度の最後の卒業生まで計262人について、氏名、生年月日が記されている。当時北陸電力の社宅に一時的に居住していた2人を除く260人は中宮出身者である。このうち248人については、中宮在住者からの聞き取りによって現在の居住地を知ることができた。

248人のうち男性は118人、1935年生まれから1955年生まれであり、1994年現在においては39歳から59歳（39歳：5人、40歳代：52人、50歳代：61人）である。女性は130人、1934年生まれからは1956年生まれ、38歳から60歳（38～39歳：8人、40歳代：70人、50歳代：51人、60歳：1人）である。

表-1 中宮小学校卒業者の居住地分布（1947年度～1967年度卒業生）

居住地	男性 ⁽¹⁾		女性 ⁽²⁾		計	
	人数	%	人数	%	人数	%
A 中 宮	24	20.3	13	10.0	37	14.9
B 吉野谷村	1	3.4	2	10.8	3	7.3
C 周辺行政村 ⁽³⁾	3		12		15	
D 鶴来町	33	64.4	30	59.2	63	61.7
E 金沢市	34		36		70	
F 金沢市近郊 ⁽⁴⁾	9		11		20	
G その他県内	0	0	1	0.8	1	0.4
H 北 陸	1	11.9	2	19.2	3	15.4
I 関 西	7[6] ⁽⁵⁾		20[15] ⁽⁵⁾		27[21] ⁽⁵⁾	
J 中 部	1		2		3	
K 関 東	4		0		4	
L その他国内	1		1		2	
計	118	100.0	130	100.0	248	100.0

中宮小学校「中宮小学校卒業生名簿」をもとに卒業生262人についての聞き取り調査にもとづく、死亡者、居住地不明者を除く248人についての情報

- (1) 男性／1935年生まれ～1955年生まれ
- (2) 女性／1934年生まれ～1956年生まれ
- (3) 周辺行政村：尾口村、鳥越村、白峰村
- (4) 金沢市近郊：野々市町、松任市、小松市
- (5) []内、京都府、内数

これらの人々の、現在の居住地については、表-1にまとめた。居住地域の区分は以下のとおりである。A：中宮、B：吉野谷村（中宮を除く）、C：吉野谷村周辺行政村（実際には尾口村、鳥越村、白峰村）、D：鶴来町、E：金沢市、F：野々市町、松任市、小松市、G：その他県内、H：北陸（富山県、福井県）、I：関西（〔 〕内は京都）、J：中部（実際には愛知県）、K：関東、L：その他国内。なお、それぞれの転出時期、その後の移動の経緯については不明である。

中宮在住者は、248人のうち男性が24人（男性の20.3%）、女性が13人（女性の10.0%）、計37人（全体の14.9%）である。男性は5人に1人の、女性は10人に1人の割合で現在中宮に在住している。後継者が中宮に居住していない世帯が相当数あると考えられる。これについてはⅢで詳しく述べる。

転出者の居住地の大きな特徴は、D：鶴来町、E：金沢市、F：野々市町、松任市、小松市など中宮と車で1時間前後で往来できる地域に集中していることである。D、Fはいずれも金沢市に通勤、通学、あるいは日常生活においての往来が容易な地域である。D、E、Fの地域をまとめて、ここでは「金沢圏」と呼ぶ。

転出先を男女別にみてゆくと、男性118人のうち、64.4%を占める76人（D：33人、E：34人、F：9人）が金沢圏に居住している。これにたいして中宮近辺の居住者（B：1人、C：3人）は3.4%にすぎず、またその他の県内の居住者は1人もいない。残り11.9%は、京都をはじめとした県外（H：1人、I：7人〔6人〕、J：1人、K：4人、L：1人）に転出している。

女性については、金沢圏居住者が59.2%（D：30人、E：36人、F：11人）を占めるが、男性に比べると居住地が拡散している。中宮近辺が10.8%（B：2人、C：12人）である。その他は、県内1人を除くと15.7%が県外（H：2人、I：20人〔15人〕、J：2人、K：0人、L：1人）に転出している。かつて中宮からの主な出稼ぎ先であった京都を中心とした関西圏への転出が、男性は50歳代が6人〔5人〕、40歳代が1人〔1人〕と減少しているのにたいして、女性は50歳代が11人〔10人〕、40歳代が9人〔5人〕と県外転出者の8割を占めている。これは、中宮出身女性が1960～70年代において関西に就職するケースが多かったためか、それ以前に中宮から関西に転出しそこに居住地を定めた人々が、中宮出身者に配偶者を求めたためか、詳しい情報はえていない。

以上のように、40歳代、50歳代の中宮出身者のうち中宮在住者は14.9%（男性20.3%、女性10.0%）に過ぎない。これに中宮に隣接する区や行政村在住者（男性3.4%、女性10.8%）をあわせると、男女とも5人に1人は中宮ないしは中宮近辺に居住している。また、金沢圏居住者が、全体の61.7%（男性64.4%、女性59.2%）までを占めている。これらをあわせると、中宮小学校卒業者の約8割が、中宮と車で1時間前後で往来できる近距離内（中宮、中宮近辺、金沢圏）に居住していることがわかる。

Ⅲ 中宮区民と世帯

1990年の国勢調査によると、中宮の世帯数は79、人口は229人である。しかし、住民登録世帯と、中宮住民が区民と定める世帯とは一致しない。中宮区民とは、(1)「火の番」を行う、(2)区の「人夫」としての労働提供、(3)中宮に持ち家がある、という基本的にはこの3つの条件を満たす必要がある。(1)火の番は、その日の当番である2世帯から1人ずつ、2人が1組となって1日3回定められた順路にそって区の全戸を巡回し、火災についての異常がないかを確認する。中宮に常住していない世帯であっても、中宮の家屋の水道、電気が使用可能な状態となっている場合、火の番の参加が義務づけられている(詳細は14章)。(2)区の人夫とは、雪溶け後の春の水路掃除、夏(梅雨)と秋の道普請(道の草刈)の作業であり、各戸1名の成人が参加する。欠席の場合は別の機会(防火施設のペンキ塗り、公共施設の雪降ろしなど)に労働を提供する。(3)は、中宮に持ち家があっても、水道、電気を停止し家屋を使用していない状態になっている場合には、所有者は火の番や人夫作業に参加する義務はなく中宮区民とはみなされない。また中宮に持ち家をもたない借家人は、年間居住経費として3万円を区に支払うことによって、区民としての活動の参加義務は免除される。こうした借家人は、区の規則の上では区民には含まれていない。

以上が、中宮区民の主な条件である。火の番は、64世帯が32日を1サイクルとしてこれを担当している。この他、区長世帯と高齢単身寡婦2世帯が火の番の義務を免除されている。火の番参加64世帯、区長世帯、高齢単身寡婦2世帯の計67世帯が中宮区民世帯である。これに借家世帯1世帯を加えた68世帯を、本稿では中宮の世帯数とみなす。

Ⅳ 世帯の居住形態と世帯員構成

中宮世帯をここでは68世帯としたが、その全てが中宮に常住しているわけではない。中宮世帯の居住形態は、タイプA：常住型、タイプB：移動型、タイプC：火の番型、という大きく3つに分類できる。

1. タイプA：常住型世帯

タイプAは、世帯員の誰かが常に中宮に在住している世帯であり、68世帯のうち44世帯がこれに分類される。このうち、将来世帯の後継者となりうる未婚の最年少世代が同居している世帯(タイプA-1)が21世帯、最年少世代が同じ世帯には含まれていない世帯(タイプA-2)が23世帯である。

タイプA-1世帯は、後継者が世帯内に居住し、中宮を中心とした地域内に生活、生業の基盤をもち、中宮地区組織の役職や青壮年団を構成し、地区の活動の中心となる世帯である。平均世帯員数は4.71人、世帯員構成は、3世代、4世代が同居する直系家族世帯が12世帯、核家族世帯が8世帯、単身世帯が1世帯である。直系家族世帯のうち1世帯は、冬期は宿泊施設経営のため3世代が中宮に同居しているが、夏は高齢者1名が中宮に残り息子世帯は吉野谷村内の村営住宅

に居住する。タイプA-1世帯の就業状況の特徴は、就業地が吉野谷村や隣接する行政村に集中していることである。主な職業は、中宮区内、隣接村内での宿泊施設、飲食店、土産物屋、スキー場開設時の賃労働、土建業、公務員（役場、学校教員、公共施設勤務）などであり、鶴来町など金沢圏への通勤者は数人しかいない。

タイプA-2に属する23世帯の世帯員の平均年齢は70歳、世帯内に次世代を担う若い後継者が含まれていない高齢者世帯である。世帯の規模は小さく平均世帯員数は1.91人である。23世帯のうち単身が8世帯、夫婦世帯が10世帯、核家族世帯が5世帯である。単身世帯のうちの2世帯は、息子世帯が中宮内に居住し、また1世帯は息子世帯が吉野谷村の村営住宅に居住している。残り20世帯についても、1世帯をのぞく全てが金沢圏に息子や娘が居住し、親世帯と子世帯との間で互いの訪問が容易である。

2. タイプB：移動型世帯

タイプBの世帯は、半年ごと、週末に、あるいは不定期に中宮と他地域の居住地を移動する世帯である。このタイプに分類されるのは14世帯、いずれも中宮在住世帯員は1人から3人であり、また、11世帯までが息子や娘が金沢圏に居住している。これらはさらに4つのタイプ、就労移動型（タイプB-1）、冬期移動型（タイプB-2）、週末移動型（タイプB-3）、子宅在住型（タイプB-4）に分けることができる。

タイプB-1世帯は、仕事の関係上冬期あるいは夏期のみ中宮地区に居住する5世帯である。3世帯が単身、2世帯が夫婦である。3世帯は、夏期に中宮温泉や岩間温泉で働き、2世帯は、冬期に他地区のスキー場や出稼ぎにゆくため、この間は中宮の住宅には居住していない。タイプB-2世帯は、高齢の単身、夫婦世帯であり、冬は息子や娘の居住地で過ごす3世帯である。タイプB-3世帯は、金沢圏の住宅から通勤し、週末を中宮で過ごす2世帯である。タイプB-4世帯は、普段は息子や娘世帯と同居し（すべて鶴来町）、不定期に中宮を訪れる4世帯であり、3世帯が高齢者世帯である。

タイプB-1世帯のなかには、中宮の地区の活動に積極的に関与している者もいるが、タイプB-3、B-4世帯にとっては金沢圏住宅が生活の中心であり、またタイプB-2世帯も、タイプB-4世帯に移行しつつある。

3. タイプC：火の番型世帯

タイプC世帯は、中宮地区には居住せず、火の番やその他中宮区民としての義務を行うために中宮に通う。10世帯がこれに分類され、すべて金沢圏内に住宅をもつ。中宮温泉の旅館経営者、スキー場関連業種の賃労働者、中宮での畑仕事をするためしばしば中宮に通う者もあり、こうした人々は生活のなかで中宮との関係を維持している。しかし、その他の大半は、火の番など義務遂行を負担に感じながらも、中宮の持ち家を維持するため動機を休むなどして中宮に通っているようである。

表-2 中宮世帯の居住形態

タイプA (常住型)	A-1 (後継者同居型)	21世帯	44世帯
	A-2 (高齢者型)	23世帯	
タイプB (移動型)	B-1 (就労移動型)	5世帯	14世帯
	B-2 (冬期移動型)	3世帯	
	B-3 (週末移動型)	2世帯	
	B-4 (子宅在住型)	4世帯	
タイプC (火の番型)			10世帯

以上を整理すると、中宮世帯68世帯は上のような構成になっている(表-2)。

3分の2にあたる44世帯は、常住世帯(タイプA)である。これは、対照的な特徴をもつタイプA-1(常住・後継者同居型)21世帯とタイプA-2(常住・高齢者型)23世帯に2極分解している。前者は、最年少世代(将来の後継者)が世帯内に含まれている。平均世帯員数は4.7人、20世帯までが核家族、直系家族世帯である。後者は、世帯内に後継者が含まれていない。平均世帯員数は1.91人、18世帯までが単身、夫婦世帯であり、子供が金沢圏内に居住しているケースが多い。

中宮世帯の残り3分の1は、移動型(タイプB)14世帯と火の番型(タイプC)10世帯である。これらの世帯の中宮との関わり方は限られている。タイプB-1(就労移動型)世帯は、中宮近辺で就労しているケースが多いが、タイプB-2(冬期移動型)世帯、タイプB-3(週末移動型)世帯、タイプB-4(子宅在住型)世帯は、金沢圏内の居住地に生活している、あるいは生活の基盤が中宮から移行しつつある。タイプC(火の番型)世帯は、中宮の持ち家を管理するため、中宮区民としての義務を果たしているケースが多い。

V 過疎化と住民の選択

中宮世帯の居住形態は、IVで述べてきたように様々なタイプに分類されるが、全体として次のような特徴をもつ。中宮世帯は、常住世帯と非常住世帯とから構成され、常住世帯が全体の3分の2を占める。しかし、将来、世帯の後継者となりうる未婚の最年少世代が含まれている世帯はそのうちの半分以下である。また、非常住世帯と常住高齢者世帯の多くは、金沢圏内の住宅を第1居住地とする、あるいは金沢圏内に居住する子世帯と、中宮在住の高齢者世帯が互いに訪問しようというかたちで、現在の居住形態が維持されている。

1994年現在の中宮世帯の居住形態が、何故このような特異な構成をとるに至ったのだろうか。その要因を、1960年代以降の経済、社会状況の変化に対する世帯、個人の選択から探ってみよう。

中宮出身者は、過疎化が進行する以前から、世帯の継承者でなければ、中宮内で分家、結婚す

る以外は、他地域へ転出していた。1960年代以降については、世帯の継承という視点からみると、中宮世帯の選択は、結果としては大きく3つに分れた。①後継者が中宮に残り、中宮や周辺地域に就業する。現在の中宮世帯のタイプA-1（常住・後継者同居型）21世帯がこれにあたる。②年長世代は中宮に留まり、後継者は進学、就職を機に転出する。タイプA-2（常住・高齢者型）、タイプB-1（就労移動型）、タイプB-2（冬期移動型）、タイプB-4（子宅在住型）世帯のほとんどがこの選択をとっている。③世帯単位で中宮から転出する挙家離村。1970年代をピークに中宮から多くの世帯が金沢圏内へ転出していった。タイプB-3（週末移動型）、タイプC（火の番型）世帯は、選択③の変形である。

中宮世帯の特徴の1つは、上述したように、後継者が中宮に在住する世帯が非常に少ないことである。1970年代までは、中宮に在住したままで他地域へ通勤、通学することは困難であり、また地域内で安定した就業が少なく、後継者が中宮に留まることは容易ではなかった。1980年代以降は、中宮や周辺地区の観光開発や、道路事情の改善にともなう通勤、通学圏の拡大や就業機会の増加により、選択①の可能性の幅は広がった。1970年代、80年代には数世帯が他地域から中宮へ転入した。しかし、現在の中宮在住者のなかで、金沢圏まで通勤、通学するケースは数例しかなく、また観光開発も若者を中宮に引き止めることはできず（11章参照）、若者の転出は現在も続いている。

1960年代以降の中宮からの人口の急激な流出は、中宮および地域での生業形態の変化だけでなく、他地域へ転出を促す次のような状況があった。1950年代後半以降、中宮住民の鶴来町や金沢市内の高校への進学率が高まった（18章参照）。1960～70年代の高度成長期、若者が田舎での暮らしよりもマチでの生活、就職を求めただけでなく、親たちも子供が高校、大学まで進学し、より高収入の職業を獲得することを望んできた。親にとっては、後継者は中宮に留まってほしいが、よりよい就職を求めるのであれば子供の転出はやむえない。しかし、自分たちの老後のことも考え中宮と容易に往来できる距離内には子供を引き止めておきたい。通勤（前段階として通学）に便利でかつ中宮との往来が容易、この2つの条件を備えた地域が、金沢市およびその周辺の住宅地であった。中宮での聞き取り調査のなかでは、親が金沢圏内に住居を購入し子供を住ませるパターンが多いという話を何度か聞いた。IIで述べた40～50歳代の中宮出身者の居住地の金沢圏への集中は、子供をその地域に引き止めたい親側の要望が強かったのではないと思われる。

中宮の過疎化が進行した時期はまた、金沢のベッドタウンとして鶴来町、野々市町、松任市、小松市などの宅地開発がすすんだ時期でもある。たとえば、中宮出身者の鶴来町での居住地の多くは、1960年代以降鶴来町に次々と作られた「団地」や宅地開発地の住宅である。こうしたベッドタウンの形成も、中宮住民の金沢圏内での住宅購入を促す一因となっただけであろう。

中宮と金沢圏を結ぶ道路事情の改善は、中宮に在住し金沢圏の子世帯と密接な関係を維持するというかたちの他に、もう1つの特異な居住形態を可能にした。金沢圏に世帯ごと転出しそこを

第1居住地としながらも、中宮区民として中宮地区と関わる方法である。挙家離村型の転出は、通勤や子供の将来の進学、就職を考慮したうえでの選択であったと思われるが、中宮に生れ育った人々は、中宮での生活、持ち家にたいする愛着を残していた。金沢圏は、そうした転出者にとっても、中宮との関係を維持できる地域である。

世帯、個人のこれまでの選択の結果、現在の中宮の複雑な住民構成、居住形態が生じた。それでは、今後はどのように展開してゆく可能性があるだろうか。

現在の中宮地区の中核を構成する常住・後継者同居型世帯が、挙家離村、絶家する可能性は、他のタイプの世帯と比べると少ない。しかし、今後最年少世代が転出すれば、世帯規模は縮小してゆくであろう。高齢者世帯は、現在金沢圏に在住する子世帯が定年後中宮に戻らなければ、中宮区民の立場を維持しながらも金沢圏の子世帯住宅に居住地を移すか、あるいは現在の中宮在住者の転出や死亡を機にその世帯の中宮区民としての地位を放棄することになるだろう。金沢圏を第1居住地とする世帯は、後継者が、第2居住地として中宮の家屋を維持するメリットがないと感じれば、火の番などの義務の繁雑さを嫌い、区民の立場を放棄する可能性が強い。仮に上記のような状況がすすめば、中宮の世帯数、人口はさらに減少してゆく。

若者や定年者のUターンが増えることによって、世帯数、人口規模を維持、拡大させる可能性がないわけではない。しかし、高校に進学する時点で他地域に居住する若者を中宮に惹きつけるだけの積極的な要素があるかどうかは疑問である。また、中宮在住の高齢者が、金沢圏の子世帯居住地へ転出する流れはあっても、子世帯が高齢となった両親の世話をみるため、あるいは老後を過すため、中宮に戻ってくるという動きは現在のところ少ない。中宮で生まれ育った世代については、今後そうした動きもあるだろうが、金沢圏で育った世代については、祖父母や両親にくらべると、中宮地区やそこでの持家にたいする愛着や思い入れの質も異なる。ただ、第2居住地としての中宮の家屋の利用価値が高まれば（たとえば夏の避暑地、冬のスキー場利用、あるいは冬期みの宿泊施設経営など）、第1居住地型区民は減少しても、第2居住地型区民が増えてゆくかもしれない。

VI お わ り に

1960年代以降の急激な社会、経済状況の変化にたいして、各世帯、個人は何らかの選択、対応を行ってきた。その結果、1980年代以降は、中宮居住者、出身者の中宮地区への関わり方は、中宮を第1居住地とする区民（世帯）、中宮を第2居住地とする区民（世帯）、1年に何度か中宮に在住する家族を訪問する中宮出身者（世帯）など、それぞれの方針が明確となってきた。しかし、中宮世帯の現在の居住形態は、金沢圏内住宅に居住する子世帯との繋がりを保ちながら中宮に在住する、あるいは中宮区民としての立場を維持したまま金沢圏に居住するなど、中宮住宅と金沢圏住宅とのあいだの微妙なバランスによって維持されている。今後は、高齢者世帯の転出、絶家

による新たな世帯数減少、あるいは中宮の第2居住地化の進行の可能性も考えられる。

本稿では、中宮世帯の居住形態、世帯構成から過疎化の現状を分析してきたが、しかし、世帯数、人口の減少にたいする住民の危機感は、中宮での聞き取り調査のなかでは感じられなかった。筆者のこうした印象にたいして、ある住民は、「『過疎』とは行政が使用している言葉だ」と述べた。これは過疎化が人々の生活環境を著しく脅かしてはいないというニュアンスが含まれている。中宮では、地区内のスキー場開設などの開発事業に多くの区民が関わってきた。また常住者の負担とはなっているが地区の自治組織が確実に運営され、火の番などによって中宮世帯間の関係が保持され、健康センター、コミュニティセンターなど公共施設が拡充されるなど、中宮の地区を単位とした機能が維持されている。しかし、中宮の一種安定した過疎状態は、中宮や吉野谷村といった地区や行政村レベルの状況のみではなく、中宮住民が個別に、地方中核都市金沢やそのベッドタウンとの密接な関係を確保していることによるところが大きい。中宮地区を単位としてみたときの過疎化現象と、金沢圏との関係を含んだ生活空間のなかで位置づけられる過疎化問題とのあいだのズレが、中宮を「過疎」と表現するときの違和感を生み出しているのかもしれない。